



2021-4-29-5-1  
 NORTH ALPS  
 立山連峰縦走  
 SKI

'98.4/29-5/1

晴れ / 曇り

加藤一雄	L	51	才
大塚賢一		43	才
轟 祐彦		34	才
木倉 博		35	才
田中 彰		24	才



## 北アルプス立山連峰山スキー計画書

日 時 ---'1998.4/29-5/2

行 程 ---29日(水)

姫路3時集発 -- 立山駅9時着 -- 室堂 -- !一の越し -- 東一の越し -- タンボ沢! -- ロープウェイ -- トンネルバス -- 室堂 -- 一の越(泊)

30日(木)

一の越し -- 立山連峰縦走 -- !別山 -- 剣沢! -- 剣山荘(泊)

1日(金)

剣山荘 -- !剣沢 -- 長次郎(ピストン)! -- 剣山荘(泊)

2日(土)

剣山荘 -- 剣御前小屋 -- !奥大日岳 --- 室堂! --- 立山(キャンプ)

! ~ !の間はスキーです。

よく行程を熟読して地図上で確認して頭にしっかりと入れておく事!

天 候 ---29日のAM3時に加藤宅を出発

食 料 --- 行動食4食分、ジフィーズ3食分、ラーメン2食分、非常食、酒肴、洋酒、(缶ビールは一人500mLを2本用意する事)

装 備 --- 山スキー道具一式(板・ツアーブーツ・シール・クトー・ストック・ワックス・板引き紐・スパッツ・手袋)・サングラス・高度計・コンパス・笛・1/25000の地図・武器(ドライバー・プライヤー・ステン針金・ソーイングセット・ビンディングに合うボルト&ナット)・細引き・帽子

### 服装

#### 行動着

ゼロポイントアンダーシャツ&タイツ&パンツ・ニッカズボン・ウールチェッシャツ・フリースベスト・ロング靴下

#### 予備

ゼロポイントアンダーシャツ&タイツ&パンツ・靴下・フリース長袖上下・足袋(テント内)・ゴアテックスオーバーパンツ&ウエアー・フリースマスク・手袋厚手

持 参 品 --- ワンタッチアイゼン・ピッケル・カメラ・細引き・ゴアテックスシュラフカバー・ゴミ袋(大、中、小)・トレペひと巻き・水2L・テルモス300mL・ウイスキー300mL(特上)・タオル小・軍手・ビール500mL2本・酒の肴・ヘッドランプ・ザックカバー・筆記用具・非常食・シェラカップ・スプーン&フォーク・ファーストエイドキット・カメラ

共同装備 --- ビデオ2組・ラジオ1・コッフェル大2・バーナー2・ガス2・ワックス1・スコップ1・ツェルト2・ツェルトマット2・ローソク2

ビデオ>>>>>加藤・彰(一日20分撮り×4日=140分、予備電池、テープを忘れずに!)

ラジオ>>>>>大塚 コッヘル大>>>大塚・木倉

バーナー&ガス>加藤・彰 ワックス>>>>加藤・大塚 スコップ>>木倉

ツェルト>>>>大塚・轟 ツェルトマット>加藤・大塚 ローソク>>加藤・大塚

テント・シュラフ・エアマット・テントマット・は車中に置く

ジフィーズの3ヶの内1ヶのみ山へ持参してあとは車中に置く!

一の越山荘=¥8200 剣山荘=¥8000 ロープウェイ=¥1260 トンネルバス=¥2100 交通費=約¥27000 食事=¥10000 一人=約¥35000

今また、春の陽光に照らし出されたこの北アルプス立山連峰の真っ白い雪山を踏みしめている。思い起こせばこの地は4年前に初めてにツアースキーに来た地でもあり、それ以来この山スキーのとりこになっているのだが、その年からスキーそのものを履き、いきなりの山スキーだったのでおっかなびっくりは言うまでもなかったのを昨日のように思い出す。この4年間は山スキーはもちろん、夏山にも勢力的に加藤氏と出かけて色々なことを学んだせいもあって今回は気持ちの上でも多少余裕があり、また違った新鮮な雰囲気を感じ取っている。雪の量はエルニーニョ現象の関係で例年にも無いほど少ないらしく3mは少ないらしい、4年前比べてもはるかに少ないが、滑るには申し分ないほど雪は山肌にべったりを付いている。



越へのルートは見えない。高度、コンパス、地図を合わす。轟氏、キクちゃん、彰ともども、緊張しているようにうかがえる。いきなりの2500m弱からのシール登降は酸素も少々薄くて、すぐに脈が上がり、ハアハアゼイゼイである。

雪質はアイスバーンでもなく、滑降するには程良い雪である。途中で雷鳥と話をしながら高度をどんどん上げて行くが上に行くほどガスは濃くなって来る。

29日の行程は、室堂から一の越まで登り、一の越2705mから御山谷を下り、東一の越2450mへとトラバースしてタンボ沢へ下り降りて黒部平1825mまで滑り、ロープウェイ、トンネルバスに乗って室堂へ帰って来て再び一の越へ登り返して一の越山荘に泊まる計画である。

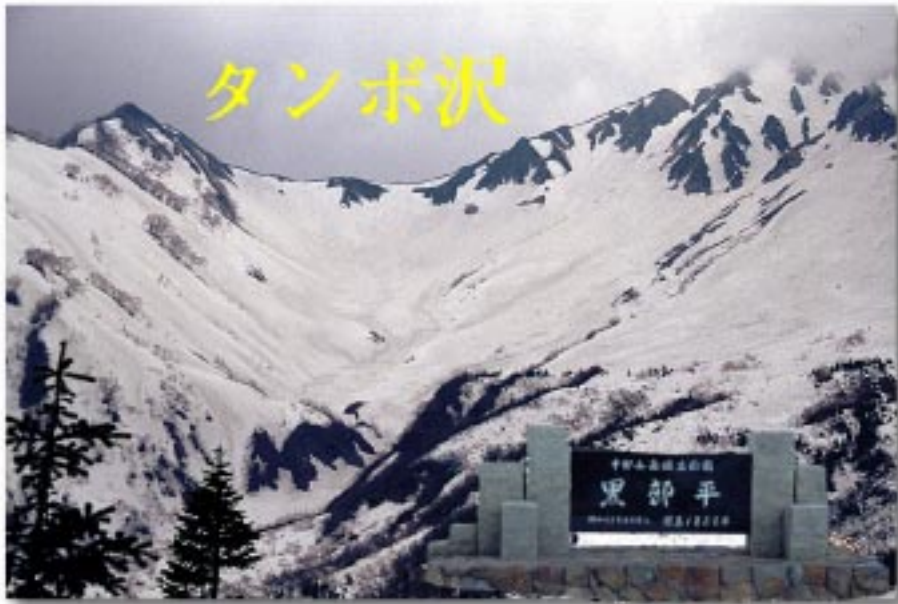
姫路(加藤宅)を3時に出て、立山までの490kmだ。立山に着くと油が底をついてしまい30分ほどロスをしてしまい約7時間もかかってしまった。まだGWの最初だと言うのに相変わらず駐車場は満車であるが、この駐車場は無料なので少々遠くて

も文句は言えない。ケーブルカー、バスを乗り継いで一気に室堂ターミナル2400mの高度を稼いでしまう。来る道中はエアコンを効かせて走らせて来たのだが、ここまで来ると気温は4度である。樹齢何百年の立山杉が猛々しくそびえている、またアオモリトドマツも緑鮮やかで群生しているが、やはり雪が少ないようで1600mあたりから雪が見え始めてきた。有名な雪の大谷も7-8mほどしか無かった。

11:40、2350m、4度。板にシールを張り付けて装備変更完了、やはり4年前同様、ガスがかかっていて視界は30mぐらいで一の

12:50、2600m、雨が降り出して来て最悪である。装備変更、雪が堅くなってきたのでクトー装着。オーバーコートを着込んだのフル装備である。

13:00、2705m、一の越山荘到着。天候は雨が降っていて非常に良くない状態である。だが、下は晴れているので、この時間に小屋に入るのはもったいので、御山谷の滑降開始である。各自はぐれてしまわないように笛を装備して、高度計を合わす。この谷は斜度も緩く初心者にはもってこいであるが、なにせガスの中なので少し滑れば後続者が見えない状態なのでムカデ走行である。3人はこんな経験は初めて



なのですごく緊張している様子が伝わってくる、一度でも転べば先行者が見えなくなるのだから・・・。

13:40、2520 m、東一の越への夏のルートを探すが、なかなか見つからず、20 mほど下へ降りてしまったようである、急な斜面を蟹歩きで登り返すが、これがまたとんでもなくしんどい。トラバースは雪が付いていないのでスキーをザックに固定しての装備変更。

14:30、2485 m、東一の越到着。今から滑り降りるタンボ沢を見下ろしながらザックを降ろし小休止。ここまで降りるとガスも晴れ渡り黒部湖が一望でき行き交うロープウェイも確認でき素晴らしいカールである。滑りだしは少々急ではあるが、どうと言うことはない、思いっきり楽しめそうな斜面である。高低差約500mの大滑降である。上部にクレバスが口を開けているがガスが晴れているので十分にクリ

ア出来る。

15:05、2320 m、5度。雪質は上部がザラメでここは湿雪で重い。今タンボ沢の中腹で靴、キクちゃんが来るのを待っている状態である。加藤リーダーがロープウェイの時間が16:15やから今日はもう、室堂山荘で泊まろう、と言っていた。

15:48、1828 m、8度。ロープウェイ乗り場、黒部平到着。何故かコケまくりで散々であった、言い訳をするわけではないが、ブーツのインナーを変えていたので足がインナーの中で動き回り板を操作出来にくい状態であった、おかげで愛用のイエローレンズのサングラスを落としてしまった。明日からはもっと気合いを入れて滑らなければ大変なことになりかねない。早速、ターミナルでサングラスを購入した。今日は小屋でインナーを細工しなければ・・・。ここから見渡すタンボ沢はダイ

ナミックな斜面で「あんなところから滑って来たのか」とみんな思い思い眺めていた。

16:50、2350 m、室堂着。なんとガスが見事に晴れ渡っているので休む間もなくリーダーが「一の越小屋まで行こう！」と言うので、またまたシールを付けクトー装着で出発することになった。昼間と違ってガスが晴れ渡っていてトレースの後がはっきりと確認出来不安もない。体は疲れてはいるが、快調に進むことが出来る、やはり視界があって景色を見渡せると言うのはものすごく強い見方である。気温もどんどん下がり雪もクラスト気味になってクトーがこちよく効いて食い込む。奥大日、雄山、立山連峰、室堂キャンプサイト、すべてが見渡せる。途中でキクが我慢出来なくなったらしく「キジうち」である、5分でも10分でも時間を急ぐと言うのに困った奴である、黒部平では時間があつたのに・・・この5分の間にでもシールで登降しているだけでとんでもなく距離は開いてしまうものなので、ここから急斜面になるので置いて行くことにすれば、彼のことだから焦ってしまってシールを踏み外しかねないと思い、待つことにする。しかし、彼の悪いところはこんな場面でも「すみません」の一言が無いところである。リーダーがたまりかねて「かってな行動をする時は必ず、その時点で地図、コンパスを確認しろ！、もし急にガスってきたらどない



するんや！」それでも反省せずに「どうにでもなる・・・」と、私は開いた口がふさがらずこんなところで口論しても体力を消耗するだけや、と思い「行くで！」と言って先を急ぐことにした。

17:57、一の越山荘到着、0度。明日の朝は冷え込んでアイスバーンであろう。早速暖気室で濡れた物を干す。持って上がった重い貴重なビールを雪で冷やし「カンパイ！」、いつもながらなんとうまい喉越ししか！。夕食はハンバーグであった。

20:00、部屋に帰って飲み直しと思ったが、キクちゃんと轟氏は相当疲れたのであろう、向かいの部屋でもう爆睡状態であった。我々も21時には寝入っていた。外は氷点下になっていて風がビュービューをうなりを上げている。

今日一日を振り返れば、行動範囲こそ少ないが装備変更は

シール、クート、レインウェアと、氷ノ山のノウハウが効いている一日であったが、滑りはガスの中こそ少々緊張したが、ロープウェイ、バスとゲレンデのリフト並に移動手段を使い楽であったにもかかわらず、登りは室堂から一の越までの350mを2回登るだけなのだが初日の寝不足のためかみんな疲れている様子であった。残念なこと言えば初日からリーダーのビデオカメラが故障してしまい役にたたなかったのが非常に悔やまれる。

30日の行程は、一の越山荘を後にして急斜面の雄山2992mを登り大汝3015m、富士ノ折立2999m、真砂岳2861mと縦走して真砂沢を滑り降り剣沢雪渓に合流1800mして剣沢を登り返して剣山荘2450mに泊まるダイナミックな計画である。

4:30、起床、氷点下3度。天気は快晴である。昨日のガスはどこやら・・・。昨日の滑った御山谷方面が見事に雲海に包まれていてなんとも言いようのない美しい景色である。時間が経つに連れて白銀の山々が御来光に照らし出されて金色に輝き出し「素晴らしい！」の一言の言葉ではもったいない光景である。早速となりの部屋の轟氏とキクちゃんに告げると彼らは生まれて初めての光景に絶句していた。この山荘は朝食が非常に遅く7:00にならないと出来ない。こんなにいい天気なのに・・・おにぎりだけを作ってもらっていたらよかったと思うしだいである。時間があるので外に出て浄土山方面に散策に出かけると雷鳥がそこまでせまって愛嬌を振る舞っているかのように「ゲロゲロ」と鳴いていた。昨日登って来たルート、リーダーの好きな奥大日岳、室堂周辺が一望でき雪は少ないと言えども素晴らしい景色である。6時頃オートルートを目指しているであろう、3人のパーティーが重いザックを背負ってアイスバーンの雪に金属音を響かせてバランスを保ちながら消えて行った。私もいつかはこのルートにチャレンジしてみたく心待ちにしている。

7:30、気温4度。装備完了、スキーをザック固定で急斜面の雄山の登りである、いきなり心臓が踊り始めて呼吸が苦しくなってくる。



8:30、雄山 2992 m 登頂。大変な登りでみんなホッとしてる様子である。ここまで登るとこの前に行った御岳山がはっきと見える。まるで空に浮かんでいるかのようにどっしりと構えているのが妙に猛々しかった。下を見ると御前谷のとんでもない急な斜面である、当初はここを滑る計画もあったのだが・・・こうして眼下に見ると私のテクニクとこのアイスバーン状態の雪質ではかなりの無理があるように思える、サルまたのコルまで行っても滑れるかどうか？そこらじゅうクレバスだらけである。雄山神社3003mで無事の祈願をして、立山最高峰の大汝山への縦走である。いきなりの雪渓で装備変更、アイゼン装着。アイスバーンの雪にここちよく12本爪が食い込み面白いくらいであるが、いかんせん轟氏がやはりこういった状況ではビビってしまい四苦八苦の状態である、見ているアブなっかなしいので「氷ノ山での3点支持を思い出

て！」と、ついつい声も大きくなる。クリア出来たと思えば今度はアイゼンでスパッツを引っかけてしまいスッテンコロリである、斜面じゃなくて良かった、もし斜面なら間違いなく滑落である。

9:25、大汝山 3015 m 登頂。内蔵助カール、剣岳、八峰、五竜、唐松、爺、おまけに御嶽、白馬連峰まで一望に見渡せての360度の大パノラマである、ここが本当に日本か？と思わせる景色である。

9:40、大汝小屋と言っても屋根しか見えないが・・・、ここで小休止。一同カメラ撮り、ビデオ撮りに余念がない。装備変更、スキー引き。やっとザックから降ろせると思えば疲れも半減するというものである。

10:50、2805 m。大変なガレ場の下り・・・富士の折立をあとにして振り返ればまさに男の猛々しくごつい肌をむき出し状態で

ある。またまた装備変更で巨大なケルンの前でスキーをザック固定して真砂岳方面への縦走。

11:08、2860 m、真砂岳到着。真砂沢カールは雪がベッタリと付いていてワクワクするが、な、な、なんと、とんでもない、滑り出しは急斜面60度はあるだろう、4年前にはそれほどでも無かったと認識していたのだが・・・。助け船と言えは今日のピーカン日和りの天候で雪質が緩んでいることが幸いである。一番手に轟氏が雪上暴走族のようにカッ飛んで行った、素晴らしい滑りで巨大な白銀の斜面に思いっきりシュプールを描いている。続いてリーダーの加藤氏、「こうゆうふうに行ったらいい」と言っていたがますます急な方へ滑って行って下でビデオを構えて「オーケー！、いつでもいいで！」と叫んでいるが・・・。さあ、我々の3人は何処をどう滑ったらいいのやら・・・どこもオーバーハング気味である。根性を決めて私が横滑りで行くことにするが、2-3mずり落ちてしまい即座にピックで制御して体を立て直して、思いっきり斜面に突っ込んで回して行った、「オーオッ、行ける、行ける！、思わず声が出るヤッホー～！」、加藤氏のビデオの被写体、轟氏のカメラの被写体とばっちりに収まったようだ、・・・大満足である。しかし、キクちゃん、彰とも10m-15mほどずり落ちてしまいおまけに小さな雪崩まで引き起こしている。相当ビビっている様子



である。特にアキラは、ものすごい長い斜滑降でまるでバス道のようなシュプールを描いて相当に疲れていた。しかし、この200mの斜面をクリアするとあとはルンルンで滑れるのだが、滑り始めにパトロールらしき人が「**下の方に滝が露出しているので滑落しないように注意**をして下さい」と言っていたのでそうもいかない。1500m付近に滝らしきものを確認、またそのすぐ近くに**巨大クレバス**があり、注意をしながら斜滑降気味の横滑りでなんとか全員がクリアーする。

12:35、1800m、12度、真砂沢出合。高低差1000m距離にして5-6kmはあるだろう、もう両太股が悲鳴を上げているがみんな大満足の滑りでたんのうしたようだ。しかし、アキラは相当この滑り出しで緊張したらしくそれが尾を引きかなり疲れていた。早速ラーメンを取り出し贅沢な昼食に取りかかることにする。ここからの**3-4時間のシール登**

**り**がまた単調で相当疲れるのが目に見えている。

14:20、2110m。長次郎の出合いを過ぎて平蔵の出合いで小休止。この長次郎沢は素晴らしい谷で当初の行程では明日にここまで滑ってきてこの沢を登り返して滑降して、また剣山荘で泊まると言うものであったが、「このルートはもうヤメにしよう」で一同一致で即決。と言うもの今日の行程があまりにも充実していた縦走であったからである

う。やはり、みんな山スキーと言っても私を含めてスキーで滑降するをいうのはあまり好きではないらしく、大変に重くてつらい縦走のほうが気に入ってしまったようである。あのキクちゃんですえ「もう滑りなんか無くてもええわ！こう言う縦走で充分に大満足や！」と言うしまつで完全に彼も山の魅力にとりつかれてしまったようである。

16:10、装備変更。スキー引きで壺足。もうそこに見えているはずの剣山荘が見えなくてとんでもない急斜面を壺足で歩行、トップをきって行っているのでキクに「代わって」と言うと彼は「トップも2番手も一緒や！」やはり私は彼の感覚が理解出来ない。トップで行けば全然ピッチが落ちるのに……。ハエマツの向こう側に剣山荘を発見！。しかし、今日のこの道のりは相当充実していたので、みんなバテバテの様子である。特にアキラは脱水がかかっているようで声



## 剣御前小屋への剣沢の急斜面のガスの中



にもならない、ハアハアゼイゼイの連発である。

16:30、2470m、剣山荘到着。早速重いビールを冷やすことに余念がない。この小屋は穴場らしく素晴らしくいい小屋で山小屋の親父もそれらしくのんびりしていて好感の持てる人だった。我々を入れても3パーティーほどしか泊まっていなくて、夜は他のパーティーと色々話をしたりして盛り上がった。このパーティーは昨日も一の越山荘

一日。今日の行程は当初の計画では剣沢を滑って長次郎沢を登り返してまたここ剣山荘へ戻ってくる計画であったが、天候が2日と大荒れになるために一日繰り上げて剣沢を剣御前小屋まで登り、雷鳥沢を室堂乗越しまでトラバース気味に滑降して奥大日岳まで登り雷鳥平まで大滑降して地獄谷経由で室堂ターミナルまで登り返して究極の弥陀ヶ原までの斜滑降でファイナルとなるのだが……。

で一緒だったらしいが私には記憶が無い。また私と違ってふだんから必要外の事はあまりしゃべらない加藤リーダーの生い

立ちや経験談をみんなが耳をたてて聞いていたが、やはりとんでもないくらいの経験豊かな人でみんな驚きを隠せない様子であった。

5:00、起床。やはり天候どうり山のピークのあたりがガスがかかっている。装備は壺足でスキー引きである。雪質は夕べが暖かかったせいもありブーツが少々潜るくらいに緩んでいる。高度を稼ぐに連れてだんだんとガスが濃くなって来る、何度も何度も高度、地図、コンパスで確認するが、私にとってはこうもガスっていたら見当も付かない、まだまだ経験不足である。

8:17、2700m、2度。剣沢のとんでもない急斜面を登り切ったところで小休止、もうそこに薄らぼんやりと剣御前小屋の屋根らしきものが見える。ルートは完璧であった……さすがはリーダーである。

9:00、剣御前小屋から雷鳥沢を滑降するのだが雪不足のためにスキーをザックに固定して滑れ

るところまでトラバースする。4年前にここに来た時はガチンガチンのアイスバーンでまた壺足のあとがボコボコに凍っていて私には到底不可能な滑降であった、またすぐ横のパーティーが何人もエッジを食われて500mほどの急降下の大滑落劇をまのあたりにして見たので即座にアイゼンに履き替えて降りたものだったが、この度はやはり斜度はきついがアイスバーンでは無いのでなんとか、リーダーの後に続けば滑れると確信したので、思い切って室堂乗越まで滑って行けた。ここまで滑って行くとガスも晴れ渡り見事な景色が目

に新鮮に飛び込んできた。やはり視界が無いのとあるのでは気持ちの持ちようがかなり変わってくる。しかし、アキラとキクちゃんは相当ビビってしまいコケまくって体力を消耗していたようであった。いざスキーの滑降となると滑れるのと滑れないのではものすごく緊張度と体力の消耗度が月とすっぽんぐら



もない雪尻上を歩き、スノーブリッジを越してのやっとの登頂であった。しかし、ガスも完全に晴れ渡り、**大平原を白く埋め尽くし大蛇がうねっているかのようなバス道を抱いた弥陀ヶ原、その名の通り雪のあいだから湯煙を上げる地獄谷、ナイフエッジのように切れたった谷を流れる称名川、男らしく荒々しい剣岳、白と黒のコントラストが生えて絵になる立山連峰、**が見事に姿を表し一同シャッターを切る音がやまない。

14:07、2435m、10度。スキーデポ地点へ帰ってくる。さあ、滑降の開始である、私がビデオを持ち先に滑って急斜面下でみんなを待って構えるが、リーダーを除く3人とも見事にコケていたのをバッチリを収めた。

15:00、称名川のスノーブリッジ上で小休止。気温がぐんぐん上がり、非常に暑い、アンダーシャツ一枚だ。ここから**地獄谷**巡りのコースで**みくりが池**を後

にしての室堂への登りが続くが雪の無いところでは肩に担いだりと大変な労力である。ここは一般観光客もいるので、**まるで観光巡りと同じである。**しかし、観光客はスカートにハイヒール姿に比べて我々はとんでもない重装備なのが妙にアンバランスである。

16:25、室堂着。みんなへバっている、なんとか17:00の最終バスに間に合ったと思ったら、

な、な、なんと、リーダーが弥陀ヶ原の手前の美松まで斜滑降で行こうと言い出したのでみんなこれには開いた口が塞がらず「アゼン」としていた、当然私もである。アキラは相当バテていたのでリーダーが「鬼に見えた」と言っていた。結局、途中で八エマツにさえぎられ中断して室堂まで戻ったのだからみんな完全にブーイングであった。これは完全にリーダーのミスであった。

立山駅に着いた時は嵐のように風が吹き荒れて、テントを張って温泉につかってゆっくりこの度の縦走を話し合っ立山にキャンパイと思っただが、テントも吹き飛ばされそうなので温泉にだけ入って姫路までの帰路をとった。帰宅はAM3時であった。その日は一人で立山にキャンパイしていると色々な出来事が走馬燈のように流れてここちよく眠りについた。

